

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 13 日現在

機関番号：32678

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22531031

研究課題名（和文）子どもの居場所となる学級集団形成過程の演劇論的研究

研究課題名（英文）An Ethnographic Study on Process of the Class Becoming Comfortable Place for Children in Kindergarten and Primary School

研究代表者 岩田 遵子（IWATA JUNKO）

東京都市大学・人間科学部・教授

研究者番号：80269521

研究成果の概要（和文）：本研究は、子ども同士の関係性が親密になり、どの子にも居場所が保障されるようなクラス集団の形成過程において、定型的・儀礼的なコミュニケーションの積極的意義を明らかにしたものである。定型的表現は、一般には子どもの個性的な表現を抑圧するものとして否定されるが、これらはノリの共有を促し、親密な人間関係形成を促すこと、また、それが演技パフォーマンスの向上のみならず、知的能力の向上とも関連していることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research clarifies positive meaning of stereotyped expressions and formal communication between teacher and children through the process of class becoming the comfortable place where every single child feel comfortable. Although, in general, the stereotyped expressions said to suppress the children's individuality, this research shows that they force forming relationships between children through sharing the rhythm included in the expressions, it could help not only improving their performance in the play, but also boost intellectual faculties.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：保育学、教育方法学

科研費の分科・細目：教育学、教科教育学

キーワード：居場所、ノリ、儀礼的コミュニケーション、舞台空間、劇

1. 研究開始当初の背景

学校教育における不登校やいじめなどの問題は子どもたちが学校の中に「居場所」を見出せないことと関係している。学校が子どもにとっての「居場所」となるために教師あるいは大人はどうすればよいか、という問題については、アンケート調査や体験事例報告として行われてきたが、それらは「居場所」

概念が理論的に曖昧であるために実践的に有効な知見を提供したとは言えない。

これに対して、岩田（研究代表者）と小川（22年度連携研究者）らは、幼稚園と小学校のエスノグラフィーによって有効な実践的方略を提供してきており、その方略の一つとして劇活動と儀礼的コミュニケーションの意義を示唆している。劇的空間における役割

関係（「助け合う仲間」など）が日常の子ども達の間関係に浸透し、学級生活の関係性を組み替えていく（ある能力に劣る子どもを排除するような関係性から、各々の「良さ」を認め合い、相互に対等で共感性の高い関係性へと組み替える）、というのである。

集団生活における儀礼的あるいは演劇的コミュニケーションの意義については文化人類学や社会学においては考察されてきたが、教育学的文脈から捉えられたことは異国内外においてほとんどないが、W. ヴルフ（独）は、学校における朝礼や挨拶、座席配置、休み時間から授業へ、あるいは授業から休み時間への移行の仕方などが繰り返されて儀礼化されることによって学級集団の価値規範や関係性が形成されること、また集団構成員相互の関係性は学校や家庭という「舞台」において各役割（教師、生徒、母親等）を通して「上演」されるものであること、その儀礼の「上演」に参加することは、その集団の構成員となることであり、その集団でのふるまい方を学ぶことであることを論じている。

この演劇論的視座に立てば、これまで研究代表者らが追求してきた居場所としての学級の成立過程を新たな理論的視座でより鮮明にとらえ、事例を分析及び考察することは学級が子どもにとって居場所となるための有効な実践的方略を提供する可能性が高い。代表者らの研究では、全ての子どもに居場所が形成されていると思われる学級では、質問、発言、指名などの定型化的な儀礼的コミュニケーションのふるまいが確立しており、そのふるまいを教師と生徒が分有しつつ、自主的に学級活動や授業活動が展開していることが多い。例えば、授業中の発言は教師の指名によってのみ管理統制されるのではなく、子ども同士が指名し合って応え合ったり、ある問いに対する応答が定型化され唱和されること（例：「〇〇でいいですか」という問いかけに「いいです」と皆で唱和して応える）によって、子どもたちが自主的に授業を展開する。しかもこの学級活動は、一人ひとり平等で、問題行動が多いとされる子どもに対する否定的言明を一切排除するという教師の方針が、教師のパフォーマンスとして徹底されており、子どもたちもそのパフォーマンスを踏襲している。この事実を演劇論的視座で捉えるなら、学級という「舞台」において、相互に対等で共感性の高い役割関係を、教師と子どもたちが「上演」しているということであり、儀礼的パフォーマンスは、そのような「上演」を促す装置となっていると考えられる。研究代表者らは、教師と子どもの儀礼的・演劇的コミュニケーションがスムーズに展開するようになればなるほど、教室空間が独自の「舞台」空間となり、それゆえに子どもたちの即興的な日常会話やパフォーマンスが

より親密な表出をするようになり、そのことが全ての子どもにとっての居場所性を保障する、という仮説を持つに至っている。しかし、これらは、演劇論的視座からデータを採集、分析考察していないので、不十分であるので、これまでの研究成果を演劇論的視座という新しい視座から捉え直し、再解釈すること、また演劇論的視座からのエスノグラフィーによって、学級が全ての子どもの居場所となるための学級経営の実践的方略を考察する研究が必要である。

2. 研究の目的

子どもの居場所としての学級集団形成において、教師—子ども、あるいは子ども同士の間の儀礼的・演劇的コミュニケーションが積極的な意義を持つことを、理論的・実証的に明らかにする。具体的には、下記(1)~(3)を行う。

(1)幼稚園及び小学校における学級生活において儀礼化されたコミュニケーションにはどのようなものがあるか、を明らかにする（集会、授業の開始の仕方や終わり方、子どもの発言や質問の仕方、教師の指示の仕方、等々）。

(2)1年間の学級生活の中で、子どもたちが(1)を習得・習熟する過程を明らかにし、儀礼的・演劇的パフォーマンス習熟度の変化と人間関係の変化との関連性を明らかにする（儀礼的・演劇的パフォーマンスの習熟度が高くなるにつれて、人間関係の友好性と親密度も高くなると予想している）。

(3)全員参加の劇活動が行われている学級において、劇活動と日常の儀礼的・演劇的コミュニケーションの関係を明らかにする。

3. 研究の方法

理論研究とフィールド調査を並行して行う。

[理論研究]文化人類学や社会学、教育学等における演劇論的視座による先行研究をもとに、その視座の理解をより深め、儀礼的・演劇的パフォーマンスの集団形成における意義についての理論仮説を深める。

[フィールド調査]

(1)小学校

子どもの居場所性の高い小学校のクラス（兵庫県姫路市の公立小学校の本庄富美子教諭が担任するクラス。本庄クラスは年度当初は「問題児」として排除される傾向にあった子どもが、本庄教諭の1年間の教育活動の過程で、排除されることがなくなり、どの子どもにとっても居場所となる学級が形成される）と、それとは別の居場所性の高くない

クラス（比較のため）の2クラスをフィールドとする。原則として1学期に2回フィールドワークを行い、朝会及び授業の様子を映像記録に撮り、子どもたちと授業者（担任）にインタビューを行い、フィールドノーツを作成する。

(2)幼稚園

子どもの居場所性が高いと思われる幼稚園（子どもたちが自発的に遊び集団を形成し、自発的な遊びが一定の場所で一定の時間安定して持続しており、子どもたちの居場所が形成されている（前掲書）と思われる園）のクラスと、あまり遊びが充実していない幼稚園（比較のため）のクラスの2クラスをフィールドとする。原則として月1～2回フィールドワークを行い、登園してからの遊びの様子、集会時、一斉活動場面での様子を映像記録に撮り、担任にインタビューを行い、フィールドノーツを作成する。

(3)(1)(2)によって得られたフィールドデータを次の手順と視点から分析、考察する。

①教師と子どものやりとり含む教室全体の状況を文字記録化する。

②上記①から、教師と子どもの定型的パフォーマンスを抽出し、分類する。抽出する定型的パフォーマンスは、教師による授業展開上の定型的指示、教室の雰囲気を変換するための教師による定型的発言（例：「はい、背筋を伸ばして」）、子どもへの賞罰表現、子どもの挨拶、子どもの発言（例：指名されない場面で自発的に「意見を言ってもいいですか」と言う）等である。

③上記②で分類した定型的で応答的な（教師—子ども、子ども—子ども）パフォーマンスが、どのように習得され、習熟度を高めていくかを明らかにする。時間の経過に伴って、定型的パフォーマンスに習熟すればするほど、応答性が高められると予測している。

④定型的（儀礼的・演劇的）パフォーマンスの習熟度及び応答性が高められるにつれて、学級の雰囲気もより友好的で親密になっていくことが予想されるので、その変化を明らかにする。

⑤幼稚園の記録も同様の視点で分析する。ただし、幼稚園の場合、言語的表現よりも身体的パフォーマンスデータの分析が中心となる。

4. 研究成果

本研究によって明らかにされたのは下記のことである。

(1)幼稚園では、一斉活動場面における定型的なコミュニケーション（歌唱や定型的応答「クイズクイズ」「な—んのクイズ」など）

や儀礼的コミュニケーションを頻繁に行うことによって、子ども集団の「ノリ」（いわゆる身体的リズムのこと。研究代表者は、十年以上前から、ある理由によって「リズム」という用語を用いずこの用語を用いて論を展開している）の共有が深められていく様子が観察された。例えば、片付けが終わった後の集会の始まる前に子どもたちが保育者を待っている間などに、手遊びを行うなど自発的にノリを喚起し共同に生成していく姿が頻繁に見られるようになった（ノリの共有度が低いと、このような姿はあまり見られない）。また、このような姿が増えるにつれて、自由遊びが安定し、一定の場所で一定の時間、一定のメンバーが変わらずに遊びが持続するようになってきた。同時に、発達障害の傾向のある子ども（仮にA児とする）が、年度当初はクラスの他の子どもたちとのトラブルが多く、仲間から外される傾向にあったが、定型的、儀礼的コミュニケーションによってA児を含めたクラスの子どもたちのノリの共有が高まってくると、A児も遊びのメンバーとして受け入れられ、遊びが一定の時間、持続する姿が見られることが多くなり、一斉活動場面でも、他の子どもたちがA児の行動を受け入れる姿（例えば、A児のタイミングが合わなくても、じっと待つ）が見られるようになってきた。A児が他の子どもたちのノリにノルことができるようになると同時に、他の子どもたちもA児にノルようになってきたということであり、ノリの共有が人間関係にとって重要であること、また、異質な子どもの居場所性を創出するという点でも重要であることが示されたと言える。

(2)小学校の本庄富美子教諭が担任するクラス（以下、本庄クラス）では、そのクラスに特有の定型的なふるまい方（朝会の司会の進め方、発言の指名の仕方、指名されたときの応え方など）があり、年度当初それに習熟しているのは、前年度に本庄クラスだった生徒数名のみである。集会時や授業中におけるその数名のふるまい方がモデルとなり、時に本庄教諭自身がふるまい方を演じて見せることによって、定型的なふるまい方を学級全員が次第に習得していく。この習得が進むにつれて、学級メンバーの親密度が高くなる様子が観察された。具体的には、休み時間に生徒たちが教室から出て行かなくなり、教室で群れておしゃべりをしたり手遊びをしたりして遊んでいる姿が次第に多くなり、その際の身体的接触度が高くなっていった。また、本庄教諭は生徒への否定的評価を一切表面化せず、発達障害のある生徒や学業に遅れを取る生徒たちが少しでも良い行いをするこゝと喜ぶという価値観をことあるごとに提示することを徹底していたが、その価値観は子

もたちの親密さが増すにつれて、子どもたちに共有されていく様子が観察された。年度当初には、クラスから排除され、他の子どもを恐れて教室に入ることができなかった生徒（3年間の各クラスに年度当初にはそのような「問題児」が存在した）が、6月下旬頃から教室に入れるようになり、そのことを皆が歓迎し、仲間として受け入れていく姿が観察されたのである。

このような親密度の高さは、第一に定型的で儀礼的なコミュニケーションがノリの共有を可能にしていることによっている。そのことは、幼稚園の場合（上記(1)）と同様である。第二に、儀礼的コミュニケーションにおける関係性が、「教師」と「生徒」あるいは「生徒」同士の関係性へと転化するからである。増山真緒子が指摘するように、教室は「舞台空間」として捉えられるのであり、教師と生徒はそれぞれ俳優として捉えられ、それぞれ「見る一見られる」関係にある。とすれば、教師と生徒はそれぞれ「教師」と「生徒」を演じていると考えられるからである。

(3)以上の他に本研究が明らかにした、学級における儀礼的コミュニケーション及び劇活動の意義に関することは、以下のことである。

①物語の意味理解は、一般には子ども個人の国語理解能力と捉えられているが、本研究では、理解は集団的な過程であることを明らかにし、子どもたち集団のノリの共有度と関連していることを明らかにした。すなわち、クラスの子どものノリの共有度と、物語の意味理解は関連しており、劇活動においてそのノリを子どもたちが共有するに従って、物語の情景や登場人物への理解が深まっていると思われる言動が増えていったのである。②劇活動において、子どもたちのノリの共有が高まるほど劇における子どもたちの役割演技はその役らしい、良い演技となる。すなわち、増山真緒子は、役者の演技がそれらしいものとなるのは、役者がその役に近づこうとする役者自身の意志によるのではなく、「情動の場」（役者とその相手役と観客という3極によって「見る一見られる」という関係が成立し、その3者の間に身体的同調があること）が形成されることによって、それに拘束されることによってである、という論を展開しているが、「情動の場」は研究代表者の用語では「ノリの共有」である。すなわち、学級の劇活動の場で子どもたちの演技が良い演技となるのは、その子ども個人の意志や能力によるのではなく、役を演じる子ども同士とそれを見ている子どもたちとの間でノリが共有され、その共有度が高ければ高いほど演技もよりその役らしい演技となる。このことを、本庄クラスの学級活動としての劇活動の分析によって、実証的に明らかにした。

このことは、演技パフォーマンスの善し悪しが、個人の能力に還元されるのではなく、その集団の質によること、また、その質がノリの共有度にあるということを指摘している点で、注目すべきである。

③以上の①②のように考えるなら、子どもたちの授業における劇活動がよりよいものとなるには、日常的な学級活動（学級という舞台空間）において教師と子どもたち、及び子ども同士がノリを共有し、その度合いを深めている事が必要となる。本研究では、このことを論理的、実証的に明らかにした。

④ノリの共有度が深められているクラスにおいては、子どもたちの物語の意味理解が深められると同時に、子どもたちが自身の行為や演じる作品を反省的に捉える視点を獲得する可能性を持つことを、事例から明らかにした。すなわち、本庄クラスの6年生の古典朗読劇において、子どもたちは朗読パフォーマンスが数日間のうちに著しい向上を見せるだけでなく、題材への解釈において、自分たちの視点と作者の視点を相対化する視点を持っており、言い換えれば、自分たちのふるまいを反省的に捉える視点を持っていたのである。

このことは、劇パフォーマンスのノリの共有を深めることが、単に演技パフォーマンスを向上させることに繋がるだけでなく、知的な能力をも向上させることに繋がる可能性を持ちうることを示している。一般に音楽や美術といった表現教科と国語、算数、理科といった知的命題学習の教科は区別して捉えられ、前者の能力と後者の能力とは別物と考えられてきたが、本研究が明らかにしたのは、両者の連続性であり、表現系の科目が知的学習の土台を形成するということであり、注目すべき知見である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- ① 岩田遵子、保育実践研究としてのエスノグラフィーにおける「フィールド」とは何か(2)―遊びに対する保育者の潜在的関係性―、東京都市大学人間科学部紀要、査読無、第4号、2013、19―33
- ② 岩田遵子、保育実践研究としてのエスノグラフィーにおける「フィールド」とは何か―遊びの展開と保育者の関与の不可分性―、東京都市大学人間科学部紀要、査読無、第3号、2012、15―32
- ③ 岩田遵子、保育実践をフィールドとするエスノグラフィーとは何か、子ども社会研究、査読有、第17号、2011、127―141

- ④ 岩田遵子、映像はいかにして保育者の「反省的思考」を促す装置となりうるか—「第三者による解釈」の必要性—、東京都市大学人間科学部紀要、査読無、第2号、2011、13—34
- ⑤ 岩田遵子 遊びの援助における「見る」ことと「関わる」ことの関係性(2)、東京都市大学人間科学部紀要、査読無、第1号、2010、1—18

〔学会発表〕(計6件)

- ① 岩田遵子、小川博久、主体的学習におけるパフォーマンスと意味生成の関連性—国語科における朗読の実践を中心として—、日本教育方法学会第48回大会、2012年10月7日、福井大学(福井)
- ② 岩田遵子、保育研究における「フィールド」とは何か(3)—遊びの歴史性—、日本保育学会第65回大会、2012年5月5日、東京家政大学(東京)
- ③ 岩田遵子・小川博久、学級活動における儀式性と演技性の意義—学習の「主体性」確立の土台として、日本教育方法学会第47回大会、2011年10月1日、秋田大学(秋田)
- ④ 岩田遵子、保育研究におけるフィールドとは何か(2)—遊びに対する保育者の潜在的関係性—、日本保育学会第64回大会、2011年5月21日、玉川大学(東京)
- ⑤ 岩田遵子・小川博久、学級活動から演劇的表現活動へ—「ノリ」の連続性とその発展を通して、日本教育方法学会第46回大会、2010年10月10日、国士館大学(東京)
- ⑥ 岩田遵子、保育研究における「フィールド」とは何か、日本保育学会第63回大会、2010年5月22日、松山東雲女子大学(愛媛)

〔図書〕(計3件)

- ① 小川博久、中山昌樹、岩田遵子、他、遊び保育の実践、2011、102—111、225—235
- ② 小川博久、萌文書林、遊び保育論、2010、265
- ③ 岩田遵子、他、図書文化社、教育方法39 子どもの生活現実にとりくむ教育方法、2010、82—97

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩田 遵子 (IWATA JUNKO)
東京都市大学・人間科学部・教授
研究者番号：80269521

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

- (3) 連携研究者 22年度のみ
小川 博久 (OGAWA HIROHISA)
聖徳大学・文学部・教授
研究者番号：60002698